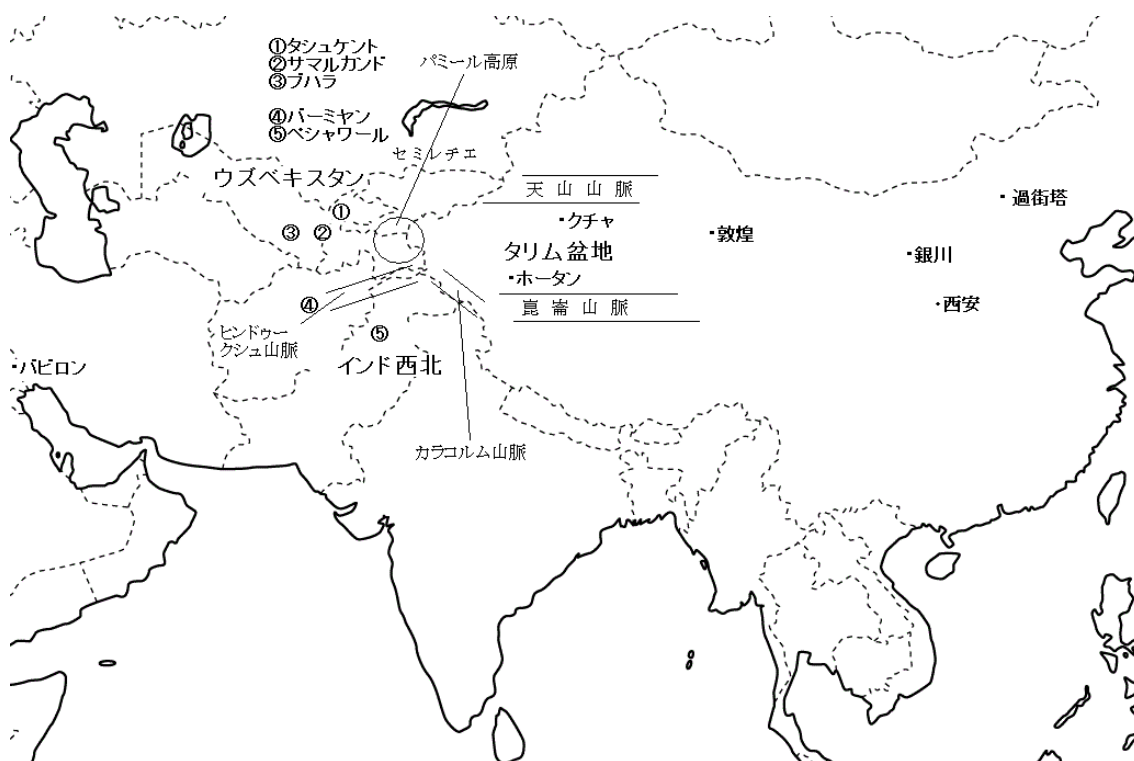


シルクロードの文字 ―ギリシアとインドの出会い(2)―

吉池孝一

1. はじめに

異なる文字組織や異なる表現形式が出会ったときに何が生じるか、シルクロードの文字をとおして見てみよう、というのが本稿の目的である。『KOTONOHA』第189号では「ギリシアとインドの出会い(1)」としてアレクサンドロスの東征とともに東方世界に伝わったギリシア文字ギリシア語の貨幣の銘文を検討した。今回はアレクサンドロスの東征軍が興したグレコ・バクトリア王国(前3-前2世紀。現在のウズベキスタン東南部からアフガニスタン最北部一帯)から、インド西北のインド・グreek朝までの貨幣の銘文を検討する。



2. グレコ・バクトリア王国

ウズベキスタンの東南部には、アレクサンドロスの東征軍が興したグレコ・バクトリア王国の故地がある。この王国はギリシア文字で書かれたギリシア語の貨幣を発行した。ここに提示した写真はバクトリア王国の創始者ディオドトスが発行したとされる紀元前3世紀の銀貨である。古代文字資料館所蔵。



表



裏

裏の右



b a s i l e o s → basileōs 王の

裏の左



d i o d o t o u → diodotou ディオドトスの

表（左側）は若いディオドトスの肖像。裏（右側）は雷霆を投げるゼウスの立像¹。裏の右にギリシア文字ギリシア語で ΒΑΣΙΛΕΩΣ (basileōs 王の) とあり、左に ΔΙΟΔΟΤΟΥ (diodotou ディオドトスの) とある。左右で“王ディオドトスの”となる²。なお、ディオドトスの名をもつ貨幣には二種ある。ディオドトスの老いた肖像のものと若い肖像のものである。両者ともにディオドトス1世とする説と、老いた像をディオドトス1世とし、本貨幣のような若い像を息子のディオドトス2世とする説がある³。いずれにしても、アレクサンドロス後期の貨幣銘文「ΒΑΣΙΛΕΩΣ（王の）＋王名の属格」の、ΒΑΣΙΛΕΩΣ（王の）を用いる形式を利用し、王であることを表明する貨幣となっている。

¹ 戸田敬(2005)は、雷霆を投げるゼウス像はディオドトスがセレウコス朝の東部地域で武力をもって権力を確立したことを表明したものとする。

² 王名の属格の意味するところについて、『KOTONOHA』第189号で「この属格が何を意味するか問題である。アレクサンドロスの【加護、権威、領有】であるか、それともアレクサンドロスの【貨幣】であるか、或いはそれ以外であるか不明にして知らない。」とした。参考までに、中村元、早島鏡正訳(1963)1巻336頁に「ディオドトス王の(貨幣)」とあることを記しておく。

³ 以上、前田耕作(1992:101-107)参照。

3. インド・グreek朝

その後、グレコ・バクトリア王国の勢力は、ヒンドークシュ山脈を越えて、インド西北部に進出した。インド・グreek朝と呼ばれており⁴、ギリシア文字ギリシア語と、カローシュティエー文字“ガンダーラ語”の2言語併用貨幣、およびギリシア文字ギリシア語とブラーフミー文字“インド語”の2言語併用貨幣を発行した。なお“ガンダーラ語”は、インド西北のプラークリットをカローシュティエー文字で表記したものを指す。“インド語”は、プラークリット諸語、サンスクリット、混淆サンスクリットを広く包含したものである。便宜的な呼称である。

グレコ・バクトリア王国のギリシア人諸王のうちデメトリオス1世（在位は前200-185年）はヒンドークシュ山脈を越えてインドの西北に進出したとされ、これ以降の諸王の貨幣とヒンドークシュ山脈以北にとどまっていたころの諸王の貨幣とは異なる面がある。銘文についていえば、ギリシア文字で記されたギリシア語であったものが、インド西北に進出した後は、表にギリシア文字ギリシア語、裏にカローシュティエー文字やブラーフミー文字で記されたインドの言語というように、表裏に異なる文字と言語が記された2言語併用貨幣が現れる。初期の2言語併用貨幣にどのようなものがあるか確認し文字種を示すと図3のようになる⁵。バクトリア諸王の系譜と在位年は前田耕作(1992)による⁶。

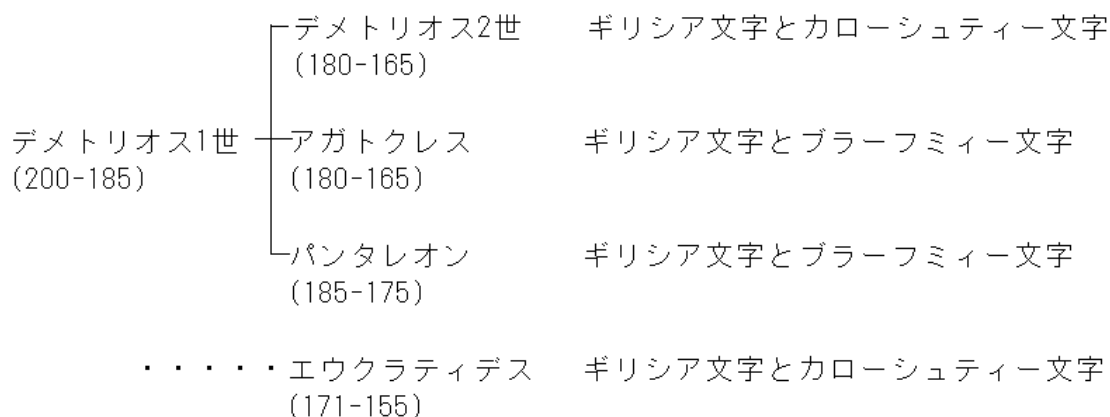


図3. デメトリオスの子と貨幣の文字種

デメトリオス1世の息子には、デメトリオス2世、アガトクレス、パンタレオンの三人がいたという⁷。そして、それぞれの王名の2言語併用貨幣が発行され

⁴ 田辺勝美(1992:55)に「ヒンドークシュ山脈以南だけを統治したギリシア人王をインド・グreek朝といってグレコ・バクトリア朝と区別している。」とありこれに従う。

⁵ 渡邊弘(1973) Mitchiner(1975) 田辺勝美(1992) 前田耕作(1992) グプタ(2001)による。

⁶ 前田耕作(1992:146, 163)参照。

⁷ 前田耕作(1992:163)参照。

ている。デメトリオスとするものは、ギリシア文字とカローシュティー文字によるものであり、これは1世のものではなく息子の2世のものとされる⁸。アガトクレス、パンタレオンとするものにはギリシア文字とブラーフミー文字によるものがある⁹。これにやや遅れて、王位についたとされるエウクラティデスは、ギリシア文字とカローシュティー文字による2言語併用貨幣を発行した。まず古代文字資料館が所蔵するアガトクレスの貨幣を紹介する。

3.1. アガトクレスの2言語併用貨幣

次の写真はアガトクレス（前180-165年）の銅貨。貨幣の両面を金型で挟み込んで打刻した点はギリシア貨幣の様式によるものであるが、方形であるところはインド貨幣の特徴である。ギリシア系のコインは円形であるがインド西北に進出した諸王は、円形貨幣を発行しつつその他に、インド貨幣に倣った方形の銅貨を新たに導入したという¹⁰。これと同種の貨幣はMitchiner(1975)の81頁に6種掲載されており、その記述によると表は右向きのライオンであり、裏は右手に花を持ち左向きに歩く女神の像であるという。



表



裏

⁸ 前田耕作(1992:161)「これらのコインはいずれもデメトリオスⅡ世のものと考えられる。そしてこの二言語併用には特別な意味があったと思われる。それはカロシュティー語文化圏とデメトリオスⅡ世との深いかかわりを示すものにほかならない。デメトリオスがインダス河流域の経営に力をふるったからなのかもしれない。」

⁹ この点はグプタ(2001)の24頁に指摘がある。貨幣の見本は、アガトクレスについてはMitchiner(1975)の81頁、パンタレオンについてはグプタ(2001)の217頁No. 36およびMitchiner(1975)の84頁参照。

¹⁰ 中村元、早島鏡正訳(1963:340)1巻に「デーメトリオスの貨幣の大体の様式はギリシア風であるが、形はインド風に方形である。ここにはギリシアの貨幣とインド古来の貨幣との融合のあとが認められる。」とある。田辺勝美(1992:55)に「インド・グreek朝の諸王は、……。また、ギリシア系のコインは円形であるが、マウリヤ朝下で発行されていたパンチ刻貨の方・矩形コインに倣って方形の銅貨を新たに導入した」とある。

この貨幣の銘文は完全ではないが Mitchiner(1975)を参照して摩滅部分を[]で示す。表の銘文をみると下のようである。



b a s i l e o s →basileōs 王の



[a][g] a t h o k l e o u s →agathokleous アガトクレスの

表のライオンの上と下にギリシア文字ギリシア語の銘文がある。上は左から右に B A Σ I Λ E Ω Σ (basileōs 王の)、下は左から右に [A Γ] A Θ O K Λ E O Y Σ (agathokleous アガトクレスの)¹¹とあり、“王アガトクレスの”となる。アレクサンドロス、ディオドトスの貨幣同様に王名の属格を用いる。

次いで、裏の銘文をみると下のようである。下は撮影の角度を変えた写真。



a g a t h u k l a y a [sa]→agathuklayasa アガトクレスの



ra ja [ne] →rajane 王の

裏の女神の右側と左側はブラーフミー文字インド語の銘文となっている。

¹¹ 属格形については田中美知太郎、松平千秋(1970:186)を参照。es 語幹の単数属格は-ousで agathokleous となる。

ブラーフミー文字の銘文であるが、女神像に向かって左側に、上から下に 6 文字配されている。これを 90 度左に倒して左から右に読むと a-ga-thu-kla-ya-[sa]とある。女神像に向かって右側に、上から下に三文字配されている。これを 90 度左に倒して左から右に読むと ra-ja-[ne]とある。なお、このローマ字転写は Mitchiner (1975:80) の明瞭な貨幣銘文を参照したものである。ブラーフミー文字インド語の rajane の ne や agathuklayasa の..yasa/asa/sa の機能であるが、ガンダーラ語やサンスクリット語の属格形とは合わない部分があるけれども、対応するギリシア語銘文に basileōs (王の)、agathokleous (アガトクレスの) とあること、及びほぼ同時代のエウクラティデスの貨幣銘文にカローシュティー文字ガンダーラ語で maharajasa (大王の。asa 属格形)、evukratitasa (エウクラティデスの。asa 属格形) とあることからみて、それぞれを属格として大過ないであろう。次にエウクラティデスの貨幣をみる。

3.2. エウクラティデスの 2 言語併用貨幣

次の写真は古代文字資料館所蔵のエウクラティデス (前 171-155 年) の銅貨。貨幣の両面を金型で挟み込んで打刻した点はギリシア貨幣の様式によるものであるが、方形であるところはインド貨幣の特徴。表には王の右向きの肖像があり、その周囲にギリシア文字で記されたギリシア語で“大王エウクラティデスの”とある。裏にはギリシア神の騎馬像があり、その上と下にカローシュティー文字で記されたインド西北地方の言語で“大王エウクラティデスの”とある¹²。



表



裏

表の左



b a s i l e ō [s]→basileōs 王の

¹² 中村雅之 (2004b) 参照。

表の上



m e g a l o u → megalou 大いなる

表の下



e u k r a t i d o u → eukratidou エウクラティデスの

裏の上



sa ja ra ha ma → maharajasa 大王の

裏の下



sa ta ti kra vu e → evukratitasa エウクラティデスの

表のギリシア文字ギリシア語は、左から右に、basileōs (王の)、megalou (大いなる)¹³、eukratidou (エウクラティデスの)¹⁴とある。“大王エウクラティデスの”となる。basileōs megalou (大王) はカローシュティー文字ガンダーラ語の maharaja (大王) をギリシア語に訳した属格形。maharaja (大王) というインド語の伝統的な定型表現をギリシア語の銘文に取り入れたもので、文字と言語はギリシアのものであるが、表現の形式はインド的となっている。裏のカローシュティー文字ガンダーラ語は、右から左に、maharajasa (大王の)¹⁵、evukratitasa (エウクラティデスの)¹⁶、とある。“大王エウクラティデスの”となる。maharaja (大王) というインド的な表現を前面に押し出した単語を使用する。なお中村雅之(2004b)に、evukratitasa の ta の下の平行線は ra と区別

¹³ megalou は、形容詞 megas (大いなる) の男性・単数・属格。田中美知太郎、松平千秋(1970:196) 参照。

¹⁴ eukratidou は、ēs に終わる名詞 (eukratidēs エウクラティデス) の男性・単数・属格。田中美知太郎、松平千秋(1970:22) 参照

¹⁵ ガンダーラ語 maharajasa は maharaja+asa (属格)。サンスクリットの複合語 mahārāja (大王←mahat 大きい+rājan 王) の男性・単数・属格形 mahārājasya に対応するガンダーラ語であろう。サンスクリットは J. ゴンダ、鏗淳訳(1984:87, 21) を参照。

¹⁶ asa は、サンスクリット語の a 語幹・単数・男性・属格形-asya に対応する属格とみなす。対応するギリシア語が属格なので属格形として大過ないであろう。サンスクリットは J. ゴンダ、鏗淳訳(1984:87, 21) 参照。

する機能を担うなど興味深い指摘がある¹⁷。この ta であるが、ギリシア語との対応では da とあるべきところ ta となっている。

3.3. インド西北の 2 言語併用貨幣をめぐる 2 つの問題

今回紹介したインド西北の 2 言語併用貨幣をめぐる検討したい事項が 2 つある。1 つ目、伝統的な貨幣様式からみると破格とも言える 2 言語併用貨幣がこの地で出現したのはなぜか。2 つ目、2 言語併用貨幣にギリシア文字/カローシュティー文字とギリシア文字/ブラーフミー文字の 2 種が併存するのはなぜか。この 2 つについては次のようなことであろう。

1. インド西北の地で 2 言語併用貨幣が出現したのはなぜか

世界の貨幣の歴史のなかで、2 言語併用貨幣がいつ発行されたかということについては、地中海東側沿岸の貨幣銘文を検討する必要があるが、まとまった銘文をもつものとしては、インド西北の 2 言語併用貨幣が最も早いと考えている¹⁸。なぜインド西北において期を画すようなことが起こったか。このことについて、中村元、早島鏡正訳(1963:339)につぎのようにある。

バクトリアにおいては貨幣の様式は純ギリシア的であり、純粹にギリシアの重量基準に従って鑄造された。バクトリアの一般人民は征服者の技術に何らかの影響を及ぼし得るほどの進歩した文明をもっていなかったのである。ところがギリシア人がインド文化圏の内にはいると、多くの点で自分の文明と同様に進歩した古い文明に接触したので、そこで妥協融合を行なう必要が生じた。貨幣も、征服者のみならず被征服者の必要にも応じたものでなければならなかった。バクトリアの貨幣はギリシア語のみを用いていたが、インドで発行した貨幣には、表にギリシア文字を刻し、裏にはそれをインド語に翻訳したものを、インド文字で刻出した。

ここでいう「バクトリア」はヒンドゥークシュ山脈以北のグレコ・バクトリアのことである。ギリシア様式という習慣の型(文化)は、ヒンドゥークシュ山脈以北のグレコ・バクトリアの地にあっては、規範として強制力を維持していたが、インド西北に進出した勢力は、自分たちと同等か或いはそれ以上の文化に触れることにより規範意識が緩み異文化を受け入れる態勢ができたのであろう。それはグレコ・バクトリアのギリシア人王メナンドロス(ミリンダ)とインド仏僧ナーガセーナの対話を記した「ミリンダ王の問い」にも現れている。それとともに、2 言語が合璧となった碑文の存在が大きいと考える。ガンダーラの西南方に位置するカンダハルから 1958 年、アショカ王碑文が発見された。ア

¹⁷ なお、カローシュティー文字の字形については Glass(2000)が参考になる。

¹⁸ このことについては吉池孝一(2010a)で触れたことがある。

ラム文字アラム語とギリシア文字ギリシア語を併記した法勅である。これはバクトリア王国の創始者であるディオドトス1世(前256-248年)の頃のものという¹⁹。この地方に2言語を併記した碑文が建立されていたことは、2言語併用貨幣の出現を容易にしたであろう。あるいは、2言語併用貨幣の発行には、カンダハルに建立されたような2言語併用のアショカ王碑文を模すという政治的意図が含まれていたかもしれない。

2. カローシュティー文字とブラーフミー文字の2種の銘文が併存するのはなぜか

おそらく両者の領有地と何らかの関係があると見てよいのであろう。中村元、早島鏡正訳(1963:342-343)につぎのようにある。

この両王【吉池注記：アガトクレスとパンタレオン。前掲図3参照】の貨幣はカーブル溪谷と西パンジャーブとにおいて発見される。アガトクレスの貨幣はさらに南方でも、すなわちカンダハル及びシースターンまでもひろがっている。しかしその支配地域は恐らくさらに東にひろがっていたのであろう。ギリシア諸王の貨幣のうちではこの二人の国王のものだけがブラーフミー文字の銘文を有する。両王は殆んど同一型式の貨幣を鑄造し、材料としてニッケルを用いている。これは両王が中部インド及び南方インドとも経済的に密接な交渉のあったことを示している。

アガトクレスとパンタレオンは、カローシュティー文字が行われていたインド西北地域の周辺を主な領有地としていたため、ブラーフミー文字の銘文を使用したと考えることができる。いずれにしても、バクトリアの諸王のなかでブラーフミー文字を利用したのはアガトクレスとパンタレオンだけのように残り残存数も少ない。それ以外の2言語併用貨幣はギリシア文字とカローシュティー文字によるものが主流である。

3.4. インド・ギリク朝全盛期の王の貨幣

次はインド・ギリク朝全盛期を築いたメナンドロス(不明～前153年又は130年)の銀貨。表(左)の一行目は、時計9時の位置より右回りに、ギリシア文字ギリシア語で、ΒΑΣΙΛΕΩΣ(basileōs 王の)、ΣΩΤΗΡΟΣ(sōtēros 救済者の)²⁰とある。二行目は、時計7時の位置より左回りに、ΜΕΝΑΝΔΡΟΥ(menandrou メナンドロスの)とある。全体で、“救済者たる王メナンドロスの”となる。

¹⁹ 前田耕作(1992:172-211)参照。

²⁰ sōtēros は、sōtēr(救済者)+os(単数・属格)からなる。属格形は田中美知太郎、松平千秋(1970:185)参照。



表 (左)

裏 (右)

裏 (右) の一行目は、時計 2 時半の位置より反時計回りに、カローシュティ一文字ガンダーラ語で、maharajasa (大王の)、tratarasa (庇護者の) とある。tratarasa は tratara (護る人) + asa (属格) である。この tratara は、サンスクリットの *tratr* (護る人。動詞語根 *trā* 護る、に行為者接尾辞 *tr* が付いた語) の男性・単数・属格形の *tratur* に対応する語であろう²¹。中村元、早島鏡正訳 (1963:345) は *tratr* を「救い主」としギリシア語 *sōtēr* (救い主) の翻訳とするが²²、*trā* を語根とする *trāṇa* (甲冑) がある²³ ことなどから「護る人」とみたい。そうであるならば、ギリシア語の「救世者、救い主」とは意味の上で隔たりがある。ギリシア語「救世者、救い主」とガンダーラ語「庇護者」の相違については検討を要する。裏 (右) の二行目は、時計 4 時の位置より時計回りに *menamdrasa* (メナンドラの) とある。全体で“庇護者たる王メナンドラの”となる。

3.5. メナンドロスと張騫

メナンドロス (メナンドラ) は、「ミリンダ王の問い」に登場するミリンダのことである。「ミリンダ王の問い」はインド西北一帯を支配したギリシア人の王

²¹ サンスクリットは J. ゴンダ、鏗淳訳 (1984:25, 157) および中村雅之 (2004a) を参照。なお、カローシュティ一文字の字形について述べておかなければならない点がある。tratarasa の *ra* の字形に問題がある。maharajasa の *ra* と比べると明らかなように、左に平行に突き出した部分がない。

²² 「またバーガバドラ王は「救い主」(*tratr*) と呼ばれているが、これはギリシアの王号 *sōtēr* (救い主) の訳である。」345 頁。

²³ 二宮睦雄 (1989:186-187) 参照。

メナンドロスと、インドの仏僧ナーガセーナの対話で、原型は紀元前 100 年から前 50 年には成立していたとされる²⁴。漢訳経典の『那先比丘経』(大正新修大蔵経第 32 卷) 及びパーリ語経典の *Milindapañhā* (ミリンダ王の問い) として伝えられている。王名のギリシア語がメナンドロス *menandros*、ガンダーラ語がメナンドラ *menandra*、パーリ語がミリンダ *milinda* ということ、我々にはミリンダのほうが耳に慣れている。

メナンドロスの没年は明確ではないようで紀元前 153 年説や紀元前 130 年説がある²⁵。この頃は前漢の武帝の命により張騫が西域に派遣された時期とも重なる。張騫が西域に派遣された年を、建元年間(前 140~135 年)の何れかであったとして²⁶、匈奴に 10 年余り拘留され、その後目的地である大月氏(現在のウズベキスタン辺り)に至ったわけであるから紀元前 130 年から 120 年頃となる。また当時、大月氏は大夏国(グレコ・バクトリア)²⁷を属国としていたというから²⁸、時と所において、両者は触れ合うほどの距離にあったことになる。紀元前 2 世紀はギリシアとインドと中国が繋がった世紀と言って良いのであろう。張騫は 1 年ほど大月氏に滞在した後帰国し²⁹、西域の情報を漢に伝えた。ここに中国と西域を結ぶ交通路が開かれたことになる³⁰。

インド・グreek朝の後、幾つかの民族の興亡があったわけであるが、今回は、2 言語併用貨幣のその後の展開ということで、紀元 1 世紀に興ったイラン系のクシャン朝の貨幣銘文と、時代は前後するが紀元前 1 世紀のインド北方(現在のデリーの北)クニンダ族発行の貨幣銘文をみることにする。

²⁴ 中村元、早島鏡正訳(1963:325)参照。

²⁵ 前田耕作(1992:211)参照。

²⁶ 西嶋定生(1974:192)『中国の歴史 第2巻 秦漢帝国』講談社。第4刷1979年による。

²⁷ 白鳥庫吉(1970:518)によると「大夏とは、今の露領トルキスタンの南方にあるバルク(Balkh)、バダクシャン(Badakhshan)等を包含せし、バクトリア(Bactria)王國のことである。當時バクトリア地方に住居して居た土人はイラン人種であつたが、そこへギリシア人が來つて國家を建設した。之が即ちバクトリア王國である。支那では此國のことを大夏と呼んだのである。」「吾人の説によると大夏の名は土言にあらざして、支那人の稱する名稱である。此の假定説を尤もらしくするには其類例を考ふる必要がある。之に類した一例はローマン・オリエントを指すに支那人は之を大秦と申した。其大秦なる名はもとより土言ではない。支那人の付けたものである。」とある。

²⁸ 『漢書』「張騫李広利傳」第31によると「大月氏王已爲胡所殺，立其夫人爲王，既臣大夏而君之，」(大月氏、王は已に胡の殺す所と爲る。其の夫人を立て王と爲す。大夏を臣とし、之に君たり。)とある。

²⁹ 『漢書』卷61「張騫李広利傳」第31によると「騫從月氏至大夏，竟不能得月氏要領。留歲餘，還，並南山，欲從羌中歸，復爲匈奴所得。」(張騫、月氏より大夏に至る。ついに月氏の要領(共に匈奴を撃つという了解)を得るあたはず。留まること歳余にして、還つて南山にそつて、羌中より帰らんと欲す。ふたたび匈奴の得るところと爲る。)とある。

³⁰ 『漢書』「西域傳」第66上によると「漢興至于孝武，事征四夷，廣威德而張騫始開西域。」(漢興り孝武(武帝)に至る。四夷を征(うつ)を事とし威德を廣む。而して張騫、始めて西域を開く。)とある。

【参考文献（発行年順）】

- 中村元、早島鏡正訳(1963)(1964)『ミリンダ王の問い』(東洋文庫)第1,2,3巻,平凡社。
- 白鳥庫吉(1970)「大夏國に就きて (講演要旨)」『白鳥庫吉全集 第六巻 西域史研究上』岩波書店:518-523。編集後記によると「「大夏國に就きて」という講演筆記は、時と所とが明らかでないが、その年代は昭和五年頃と推定される。」とある。
- 田中美知太郎、松平千秋(1970)『ギリシア語入門 改訂版』岩波書店。もと1951年。
- 渡邊 弘(1973)『西域の古代貨幣』学習研究社。
- 西嶋定生(1974)『中国の歴史 第2巻 秦漢帝国』講談社。第4刷1979年による。
- Mitchiner, M. (1975) *Indo-Greek and Indo-Scythian coinage*, Volume I, II, III. London: Hawkins Publications.
- 菅沼晃(1980)『サンスクリットの基礎と実践』平河出版社。第3刷1984年による。
- 邵榮芬 (1982)「古韻魚侯兩部在前漢時期的分合」『中國語言學報』第一期(1982.12):127-138。
- J. ゴンダ、辻直四郎校閲、鎧淳訳(1984)『サンスクリット語初等文法』春秋社。もと1974年。
- 二宮睦雄(1989)『サンスクリット語の構文と語法 印欧語比較シンタクス』平河出版社。
- 田辺勝美(1992)『[平山コレクション]シルクロードのコイン』講談社。
- 前田耕作(1992)『バクトリア王国の興亡』(レガリス文庫)第三文明社。
- Glass, A. (2000) *A Preliminary Study of Kharoṣṭhī Manuscript Paleography*. University of Washington. 修士論文。
- グプタ, P. L. 著、山崎元一他訳(2001)『インド貨幣史 一古代から現代まで』刀水書房。
- 中村雅之 (2004a)「インドグreek貨幣の銘文」, 『KOTONOHA』第21号, 1-3頁。
- 中村雅之 (2004b)「カローシュティー文字貨幣3種」, 『KOTONOHA』第22号, 1-3頁。
- 戸田 敬(2005)「鑄造貨幣からみたグレコ・バクトリア王国の成立」『山形大学歴史・地理・人類学論集』第6号, 1-26頁。
- 吉池孝一 (2010)「シルクロードの貨幣と文字」, 『KOTONOHA』第88号, 11-16頁。
- 吉池孝一(2011)「バクトリア王アガトクレスの二言語併用貨幣」, 『KOTONOHA』第99号, 18-21頁。
- 吉池孝一(2018)「シルクロードの文字 一ギリシアとインドの出会い(1)一」, 『KOTONOHA』第189号, 17-25頁。